

論 文

観光資源としてのハコモノ¹再利用についての一考察
－文化資産としての伏見桃山城活用策－

Utilization of Existing Facilities as Regional Tourism Resource
－ A Case Study: Finding the way for Fushimimomoyama Castle
as a cultural heritage site －

Key Words : ハコモノ (existing facilities)

観光資源 (regional tourism resource)、文化資産 (a cultural heritage)

平安女学院大学 国際観光学部 国際観光学科 准教授 金川 由紀

Heian Jogakuin (St. Agnes') University Faculty of
International Tourism Department of International
Tourism Associate Professor Yuki Kanagawa

はじめに

高度経済成長期以降、日本ではさまざまなハコモノが建てられてきた。公共の福祉という意味もさることながら、地域経済の発展という側面が強調され、あるいはハコモノ建設は地域の必要条件であるかのようにさえ思われてきた節がある。しかし、この数年間の不況を経てハコモノは環境破壊や税金のムダ使いというマイナス面が強調されはじめ、いまや時代遅れの遺物化した感が否めない。

さて筆者は、2007年から和文化伝承実行委員会というものをたちあげ、関西方面でイベントを開催している。主な開催地は、伏見桃山城とよばれる場所であった。本稿はこの伏見桃山城で行った祭りの報告にあたる。この城は、かつて近畿日本鉄道が運営する遊園地のシンボルであり、いわゆる高度経済成長期に建てられた近代建造物に他ならない。2003年に遊園地の閉鎖とともに京都市に無償で譲渡されてから、その利用についてなんら

の提案もなされないまま、放置されている。この意味からハコモノと呼ぶに相応しい建物として、現在も雨ざらしのまま捨て置かれている。

筆者が伏見桃山城で行っていることを紹介することは、全国にあるハコモノを観光資源として蘇らせるヒントとなると信じる。そしてその根底には、「もったいない」²の精神が流れている。ハコモノを単に捨て置くのではなく、リユースの視点をもつことはできないだろうか。資源の少ない国土に生きる私たちにとって、それはきっと無駄なエネルギーの削減と、ものを最後まで使いきることから生まれる真の豊かさ、というものへの気づきを与えてもらえるに違いない。

日本は観光立国を宣言している。「住んでよし、訪れてよしの国づくり」、このことばを単なる呼びかけに終わらせないようにするために、「住んでよし、訪れてよしの私のふるさと」を実現してみたい。そのために個人のレベルで出来ることは何なのだろうと考えていったことが、イベントへ

¹ ハコモノとは行政が設置する公共施設のうち、特に中身（住民の利用や運営に必要な専門スタッフなど）が追いつかない状態のものを揶揄的に表現した言葉であり、ここではその施設を指す言葉として用いる。

² 「もったいない」の表側は、物的損失を惜しむ気持ちです。いっぽう、その裏側では、失ったものを手にしたり、完成させたり、そこにたどり着いたりするまでの「形には表れない大切なもの」に馳せる感謝の気持ちと、それを無にしてしまった嘆きとが一体となって、日本人独特の精神世界を形づくっています。（「もったいない完全保存版」プラネット・リンク（編集）マガジンハウスpp.9-10）

と結実したといってもいいだろう。

筆者の行った祭りはささやかな規模のものである。しかしこの活動をとおして、普段はできない体験をし、異業者の人たちとの出会いに恵まれるなど数多くの恩恵に与った。城という場（＝ハコモノ）があればこそ、できた貴重な体験ばかりであった。だから、伏見桃山城へのことばに表すことができないほどの感謝を本稿にこめるとともに、地域に眠っている観光資源への「気づき」＝活用のプロセスを実例として紹介したい。そこから地域活性化に益する「観光力」、そして今観光に求められているものについて考えていきたい。

1. 伏見桃山城での和文化伝承活動

1-1. 伏見桃山城とは何か

現在の伏見桃山城は、鉄筋コンクリートで作られた近代建造物である。近鉄のレジャーランドとして1964年に開業、敷地面積は約10万平方メートルで、伏見城をイメージした復元天守閣を中心に作庭された。かつてはジェットコースター、お化け屋敷などの遊戯施設やプールなどがあり、ピーク時の1978年には入場者が年間約100万人と賑わった。しかし、2000年のUSJ（大阪市）のオープン、レジャーの多様化や少子化などで入場者が減少し営業継続が困難となったことなどのため、2003年1月31日に閉園し、跡地は京都市に寄付された。その際、天守閣は一度取り壊しの話が持ち上がったが、地元市民の運動により、伏見のシンボルとして保存されることとなった。復元天守閣とはいえ、大天守閣は五層六階、小天守閣は三層四階、大天守閣と小天守閣は渡櫓で繋がる立派な建造物である。その証拠に京都市内の主要な場所から南の地を望めば、桃山丘陵に立つ城の姿を見ることができる。

その後、2007年10月には東映の時代劇『茶々 天涯の貴妃』の撮影が行われ、天守閣の外観は大阪城に似せて化粧直しがほどこされた。こうして、外観は映画の撮影のために見事に美しくなったのであるが、内部は非公開が続いており、人の手が

入らなくなっているためにまさに荒れ放題で放置されていた。むろんこの稿を執筆中の2009年8月現在もこの建造物は老朽化と耐震強度の問題から非公開とされたままである。

使われなくなっているこの建物を再利用することで街おこしをする。そのことで子ども達に自分たちの住んでいるところに少しは誇りをもってもらいたい。このような意図で筆者らは動き始めた。城という特殊な建造物が放置されていることは非常にもったいないではないか。遊園地閉鎖から約5年間を経て、筆者らが閉ざされたままの門をどのように開かせたのか、開門して何をしたのか、その活動から得られたもの、見えてきた課題について以下順に述べていく。それを通して、日本文化と観光資源への「気づき」＝活用というプロセスを確認したい。これこそが、まさにこれからの国際社会における日本の観光行政へも提案できる事例であると信じるからだ。

1-2. 和文化伝承イベントの概要

2008年から2009年夏までに伏見桃山城を主な舞台として行ったイベントについて概要を以下にまとめる。なお筆者は本イベントに先だち和文化伝承実行委員会（以下、実行委員会）という組織を立ち上げた発起人三人の内の一人であり、イベントでは実行委員長を務めた。

○実行委員会の設立目的：

子どもたちに和の文化に触れる機会を提供し、その体験によって和文化に触れることが徐々に広がっていくような活動を行うこと。

○天守閣の利用：

イベントは天守閣の内部を使って行うことを目標とした。コンセプトの縦軸に和文化の伝承、横軸に伏見地域の活性化を据えた。最初、どのようにすれば京都市が管理し、原則非公開となっている天守閣内部を使わせてもらえるのか、手探りの状態であった。また、イベントを開催できない場合でも天守閣内部の清掃活動をしたいと考えていた。実際清掃に出かけた時、床にはほこりがたま

り、ピータイルははがれ、障子やカーテンもあちらこちら破れるにまかせていた。

○各イベントの概要：

第1回のイベント開催期間は2008年3月29日、30日であった。その後、2回にわたって、イベントを行っている。表1に第1回から第3回までの

イベントの概要をまとめ、タイトル、日程、メインとなる催しもの、推定入場者数、子どもたちを対象とする催しものなどを一覧にした。なお入場者数は、和文化伝承実行委員会があらかじめ用意したプログラム数や舞台に設置したイス数などからそれぞれ割り出したものである。

表1. 各イベントの概要

	タイトル	日 程	メインイベント	入 場 者 数	こども体験
1	「桜と和の文化祭」	2008年3月29日 30日	和文化をテーマとする 基調講演	初日約500名、 二日目約200名	お琴体験 大型紙芝居 折り紙
2	「黄金の茶室公開」	2008年10月5日	黄金茶室公開 お茶の御手前	約200名	お茶
3	「桜まつり ～千姫の夢物語り～」	2009年4月4日 5日	千姫行列 お茶の対談と御手前	初日約100名、 二日目約400名	お茶体験 絵ことば 飴細工、大道芸

○各イベントの特徴：

第1回) 「桜と和の文化祭」

来場者は子ども連れの家族を想定して、子どもから大人まで楽しめるような演目、展示になるように企画した。例えば、お茶ならば、大人向けには講演会、子ども向けにはお茶体験ができるように工夫したわけである。

基調講演は第1回イベントであることを記念して、二日間とも行うことにした。初日は、第16代桜守りである佐野藤右衛門氏、二日目は日本舞踊重森流家元の重森由郷氏を招聘した。詳細は金川(2008)を参照願いたい。

第2回) 「黄金の茶室公開」

和文化の中でも特に“お茶”をキーワードとしてイベントを企画した。

豊臣秀吉が作らせたといわれる「黄金の茶室」(山本、2008、pp.240, 270-271には黄金の茶室についての記述がある。これは静岡県的美術館にあるレプリカを実際に見学して書かれたものである)のレプリカが大天守閣内部に残されている。これを公開することとした。そこで、メインイベントとしては、「黄金の茶室」で京都島原の司太夫による御点前披露にした。あわせて、来場者全

員にお茶と和菓子をふるまうというものである。他に、出し物としては神楽、琴演奏などを繰り広げた。

第3回) 「桜まつり～千姫の夢物語り～」

伏見桃山城の近くに御香宮神社という神社がある。筆者ら実行委員は、この神社に千姫縁の黄金の御神輿が奉納されていることを知った。そこでメインイベントは、千姫の遺徳にあやかり、子ども達の健やかな成長を祈念して「千姫行列」を行うこと、あわせて、御香宮神社にあるこの黄金の御神輿の特別公開を企画し、実施にこぎつけた。

伏見桃山城天守閣内のイベントは、第1回とは異なり、大手門のすぐ内側に限定された。耐震強度問題から使用許可がおりた場所が限定されたのである。そのため、第1回のような多種多様な内容を企画するわけにはいかなかったが、尺八と琴の演奏、民謡ショー、詩の朗読に加え、大学生による日本舞踊などを行った。また、これまでのイベントを継承する企画として、裏千家准教授(ランディー宗榮氏)によるお茶の御点前の披露と、お茶をテーマとしてランディー宗榮氏と茶匠井六園園主井上六平氏による対談を盛り込んだ。

2. 開門までにくぐった難問

イベントを行うとき問題になるのは人と資金と場所の3つではなからうか。この3つの問題を以下のように解決していった。最終的には、人の結びつき、人の輪により多くの課題を乗り越え、イベントを開催することができたと分析している。

2-1. 資金をめぐる

資金をどのように調達するか、という問題は、何かを行う際にはつきものといっている。伏見桃山城で行った各イベントの資金はすべて寄付でまかなうこととした。会場となった伏見桃山城が公共の場であり、来場者から何らかの参加費等を徴収する場合には、会場使用許可が京都市からおりない可能性が高いと区役所から示唆されたためである。無償で講演、パフォーマンス、展示出展を希望してくれる人材を探さなければならなかった。

資金については、基本的には実行委員会の主旨への賛同者を見つけることでやりくりをつけている。寄付もイベント毎に若干ではあるが集まっている。このような資金状況なので、無償で講演やパフォーマンスをしてくれる方々が見つかったことが成功の第一の鍵となったといえよう。また、2009年のイベントには、2008年度の活動を知ってくれた社会奉仕団体から寄付があったことも特筆できる。その他に、筆者が第1回のイベントについて論文（金川、2008）にまとめ、その副賞を寄付して第3回イベントの基金とすることができた。その他、ボランティア活動に助成金を出している自治体のプロジェクトに応募するなど、常に資金調達については努力を重ねている。

2-2. 人をめぐって

イベントを実施するには、多数の人の協力がなければできない。主催者の組織作りも成功を左右するといえるだろう。

当初3名で立ち上げた実行委員会であったが、第1回実行委員会には発起人以外に10名の参加があった。話し合いの場を設ける毎にメンバーが増

え、本番の「桜と和の文化祭」開催時には28名にまで上った。メンバーの職業は、大学教員や京都にある老舗のお茶屋の主人、芸術家や主婦、公務員など多彩だった。また、伏見地域出身、在住の委員だけではなく、大阪や滋賀といった近隣の府県在住者も実行委員になってもらえた。多彩な顔ぶれがそろい、各方面から活発な提案がなされ、毎回委員会は白熱した議論が交わされる。実行委員会はコアとなる顔ぶれがイベント毎に若干異動するが、今後も委員を募る活動を続けていくことが、イベントを継続できるかどうか大きく影響するだろう。

イベントが認知されるに従い、地域住民との交流がうまれ広がっていることも、人をめぐる問題の一つの解決方法といえるだろう。主催者側の組織作りだけではなく、周辺に応援団の輪を広げることがイベントの成功に繋がるわけである。この地域住民との交流について、回を追うごとにどのように展開していったのかを以下にまとめる。

第1回のイベントでは、伏見地域との交流は、酒造組合と伏見工業高等学校の展示等に限られていた。これは、実行委員会立ち上げからイベント実施までの期間に時間的な余裕が無かったためである。

第2回では反省を生かし、積極的に地元への働きかけを行うようにした。その結果、展示品の移設、つまり「黄金の茶室」を3階から1階へ移設するという作業に地元神輿保存会の援助を得られたことが特筆に価する。

さらに第3回では、京都桃山ライオンズクラブ主催の「第三回 桃山語り部の道 桜まつり」とリンクすることができた。具体的にいうと、筆者らが主催した「千姫行列」の最終到達地点をこの「桜まつり」会場にして、そこで千姫に扮した出演者（小学生、公募による応募者12名）の紹介をもらったのである。「桜まつり」も地元民の努力により毎年規模を拡大してきているイベントであり、別の主催者が開催するイベントに参加することで、来場者に双方のイベントをアピールす

る相乗効果が生じた（京都新聞2009年4月6日）。

このように回を重ねるごとに、反省点をフィードバックすることにより、地域住民との交流が深まっていることは、イベント開催にあたり生じる人をめぐる問題解決と、成功の原動力となっている。

2-3. 場所をめぐって

イベントをどこで行うのか、という場所をめぐる問題もイベントの成否に関わる重要な事項である。会場が屋内か屋外か、広さや設備の有無などによりイベントの内容がある程度制限を受けるものだからである。

伏見桃山城という場所を使用したことのプラス面とマイナス面を以下にまとめてみた。

<プラス面>

- ①天候を気にすることなくイベントを行うことができる。使用許可の制限があるものの、多彩なイベントを屋内だけで実施することが可能となる。
- ②建造物自体に特異性と魅力があること。以下のような2つの面があるといえよう。
 - ・外観が天守閣であり、さらに丘陵の上に立つということで非常に目立つ場所であること。
 - ・非公開となっていたことで、社会からその活用方法について注目をされていたこと。
- ③京都市が管理している建物であったため、無料で使用することができた。
- ④映画の撮影があったことで、話題性が高まった。撮影のために外観が化粧直しされ建物自体のイメージアップになった。また、映画を観た人たちが全国から訪れることもあり集客と宣伝の二つの面でプラスに働いた。
- ⑤天守閣内部にある知名度の高いもの（「黄金の茶室」）を無料で公開できたことで話題性がまし、イベントの集客に繋がった。具体的には、新聞に関連記事が掲載された（京都新聞2008年9月4日）、多くの来場者をよびこめたわけである。
- ⑥イベントを開催するための最低限の設備がある。

舞台やお手洗いなどといった設備を新たに設置する必要がなかった。

- ⑦②と関連するが、今回のイベントで数年間非公開であった場所が公開されるということになり、地元京都の新聞で報道された（京都新聞2008年3月6日夕刊他）。結果、宣伝費をかけずにPRできた。

<マイナス面>

- ① 使用許可を得るために煩雑な手続きをふまなければならない。京都市の管理する建造物であり、使用するには文書の提出や時間をかけての折衝が必要である。さらに、使用に関する規定が現在整備されていないという問題もある。
- ②①と関連するが、公共の場所で行うため、イベントにかかる費用の捻出をイベントで賄うことができないこと。
- ③利便性の低下。つまり交通のアクセスが不便になっている。具体的にいうと、遊園地閉鎖とともに、最寄り駅からのバスの運行がなくなってしまっている。そのため、自家用車といった手段をもたない人、年齢を召した方や身体に不自由等がある人にとって、気安く訪れることができない場所になっている。
- ④バリアフリーに対応していないこと。天守という建造物であるため周囲に石垣があり、必ず階段を登らなくてはならない。
- ⑤電気設備の不備。天守閣内部が非公開となっているため、現在最低限の電力しか供給されていない。イベント開催時は、照明、冷暖房といったことに不便を感じる。
- ⑥飲食店などが周囲にない。そのため、来場者はもちろん、常に出演者、スタッフ、ボランティアの飲食をどうするか、ということを考えなければならない。

3. イベントの開催ができた鍵

2で述べたような難問、困難がありながらも、実行委員会主催のイベントを開催できたのは、以下のような要因があったと考えている。

3-1. 城自体のもつ魅力への「気づき」

まず、伏見桃山城という地域住民には広く知られているものが活用されず存在していた。使われていない城＝「ハコモノ」がある、ということに「気づいた」ことが始まりであった。この建物をそのまま利用すること、そこでイベントをしようという流れが生じたのである。別の言い方をすれば、今回のイベントを実施するにあたり、新たなコンテンツ（観光資源）を大きな資本を投下して創り出す必要がなかった。古き「ハコモノ」の再生という側面がある。端的にいえば、そこにあるものをどのように使えばいいだろうかと考えたこと、つまり意識化したことが始まりとなったわけである。³

観光資源について、井口（2008b）は以下のよう

に述べている。換言すれば、地域環境や自然的景観に適合した暮らしぶりの所産や、地域文化という文脈のなかで、常在性をもって積み重ねられてきた生活文化の成果や文化的景観こそが観光資源であり、それはどのまちにも必ず存在するという事なのである。そのことに、地域の人々が気づくことができるか否かが、地域観光の振興にとっての大きな分岐点となるのではないだろうか（p.72）。

城という空間は非日常のものであり、そこを訪れることだけでも日常を離れる気分を提供できる特異性を内包している。その特性を生かし、現状の建造物＝「ハコモノ」の取り壊しという方向ではなく、活用という方向で検討したことがイベント開催の原動力であった。そこには、自然や生活環境への配慮をするという視点があり、時代の要請に適應しているものだったのだと考えている。

3-2. ネットワークによる観光地作りの推進

観光地づくりの進め方という問題をめぐって、日本交通公社（編）（2004）では、推進体制のあり方について、以下のように述べている。

行政主体型、協議会型、住民組織（住民有志）主導型の三つの方式が考えられる。

[中略]

第三の住民組織（住民有志）主導型は、住民有志の「地域おこし」的な取組みからスタートしたものである。住民有志には、Uターン者、Iターン者の例が多い。ほとんどが手弁当からスタートするため、事業実現のためには地域の住民や行政、各種団体などの理解と協力・支援が非常に重要であり、地域の中でのコミュニケーション、コンセンサスづくり、強いリーダーシップが求められる（pp.273-274）。

筆者ら実行委員会主催のイベントは、この住民組織（住民有志）主導型の典型といえよう。実行委員会がばらばらに存在している住民、行政、各種団体を結びつけるものとして機能し、ネットワークを形成できた（図1）。つまり、地元の住民、行政、各種団体の3つがネットワークを築くことで、イベントを開催できたわけである。

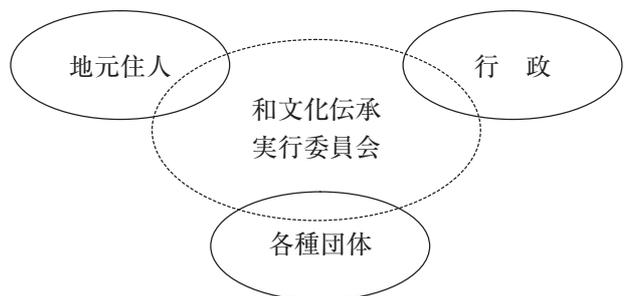


図1. 人のネットワーク

イベントの度に、地域住民との関係がより密接に、より多くの人を巻き込むことができています。

³ この運動は日本中に点在する「ハコモノ」の残骸、廃墟と化した「ハコモノ」を再生する契機となると考えている。あるものを使うのは、現代の価値観にマッチしていると信じる。

巻き込むこと＝輪が広がることで、伏見地元の祭りという認識が徐々に浸透してきているといえよう。また、イベント終了後に次回の参加申し込みについての問い合わせがよくあるが、これは実施したイベントがその場限りのものではなく、参加者に次の広がりをもつものとして認識されているということを示している。

3-3. ピラミッド効果の誕生

イベントを重ねていく中で、核になるものを確立していくことができてきている。この核は頂点と言い換えてもいいであろう。この核は実態として目に見えるものと目には見えないものの2つがある。

目に見える核は、伏見桃山城という建造物である。目に見えない核とは、いわば和文化的あるいは精神とよべるようなものであり、イベントの内容を検討、決定しているものである。常にこの核に依拠しながら、プログラムを決定できるようになってきているのだ（図2）。

目に見えない核は、具体的には「お茶」文化と「千姫」というキーワードである。伏見桃山城で行ったすべてのイベントで来場者全員にお茶を振舞っている。しかしこれは、主催者らが自然に行ってきた行為であったが、ここであえて考えてみると筆者をはじめ実行委員会は、和文化的の中でも特にお茶に深い思い入れがあるのではないかと考えるのだ⁴。思えば、筆者の幼い頃は、お茶とは身近なものであった。お茶うけのお菓子をつまみながら、茶のみ話に花を咲かせ、時には人を茶化し、へそで茶が沸くような冗談を言い合ったりもした。茶柱が立つか立たぬかに一喜一憂し、ズイズズッコロバシに興じた。日本の生活にはいつもすぐ近くに急須があった。茶処宇治の近くで育った筆者にはあまりにも普通で、空気のように

に思っていた存在である。しかし、ふと気がつくと、今の日本の生活から“茶”は消えかけているのではないか。このようなあせりを無意識のうちに、実行委員会は共有していたのだ。

また、「千姫」といった伏見に縁のある歴史上の人物を取り上げることで地元の歴史への「気づき」が生じる。平たく言えば、子ども達が「伏見ってそんな有名人が住んでいたところなんだ」、ということや「他にもどんな人が伏見にいたのか」、とか「どんな出来事が伏見にはあったのかしら」という疑問や気づきが生じてくれればいいわけで、やがて伏見の歴史や土地に興味をもってくれると信じている。

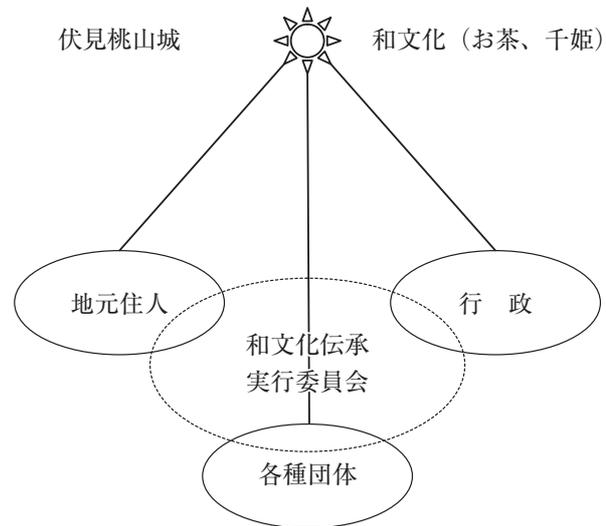


図2. ピラミッド効果

上述した地元の住民、行政、各種団体のネットワークの強化に、ここで述べた頂点といったものが立ち現れることで、エネルギーが平面から立体へと拡張を起し、一方向へベクトルをもつようになる。そのエネルギーがイベント開催や街おこしを可能にしていく。

ピラミッド効果が生じれば、今まで眠っていたものが地元の観光資源として生命あるものとして

⁴ 茶匠井六園第七代園主、井上六平氏の名刺には、「一期一会（ふれあい・おもてなし）もMOTTAINAI（命あるものへの愛）も自然との共生 他者への寛容も 先人が大切にしてきた日本の美しい心でした 今 人間も環境もバランスを失いつつある時 少し止まって 和の魂（たまご）-日本の素晴らしさを見直したいものです 一杯のお茶は…そんな心あたたまるひとときを貴方に差し上げることが出来ます」とある。

再認識されるようになる。つまり、イベント前には単なる「ハコモノ」に過ぎなかった伏見桃山城が、何らかの意味や価値のあるものとして着目されるようになってくるわけだ。そのことで、再生することへの第一歩を踏み出したともいえる。

4. 今後の展開と課題

今後の伏見桃山城天守閣の利用方法については、耐震強度調査の結果を待ち、前述した人のネットワークを強化する中で進めていく必要がある。さらに以下に述べる3つの視点をもつことで、宝のもちぐされ（「ハコモノ」のもちぐされ）から脱却することができるだろう。

4-1. 観光資源としての視点

渡邊（2008）は観光資源を以下のように部類している。

観光資源は幅広い分野のものが含まれるが、一般的に、自然資源と文化資源（人文資源）の2種類に大別される。（中略）人の手により作り上げられたのが文化資源である。社寺、建造物や史跡、また絵画、陶磁器、彫刻などの美術工芸品、民族文化財などが文化資源に含まれるほか、音楽や演劇、民話なども文化資源である。文化資源も自然資源と同様に、有形資源と無形資源に分類できる。無形資源には、オペラ、コンサート、ミュージカルなどの音楽や、伝統行事の祭事などが含まれる。また、美術館、博物館や記念館も文化資源と考えられる。なお、現在多くの観光者が訪れているテーマパークやリゾートは観光施設に分類されると考えられる（pp.42-43）。

伏見桃山城は、歴史的な建造物ではないので文化資源ではない。さらに、遊園地が閉鎖されるという状況の下、観光施設ですらなくなった。また、これ以後も非公開という状況が続き利用されない

場合には、大きな廃棄物（＝廃墟としてのハコモノ）になってしまうとさえいえるだろう。そこでイベントを行ったことは、少なくとも何らかの利用方法があることを示したわけである。

井口（2008b）は観光資源に関して以下のように記述している。

多様かつ複合的に観光資源を擁する地域も、限られた数少ない観光資源しかもたない地域にとっても共通していえることは、地域の生活者の視点に立ってそれを観光対象にする努力を、地域が主体となって尽くさなければならないということである。そのためにも、観光資源を経済活性化の手段とみなすのではなく、先人から受け継いだまことに「遺産」として、大切に守りながら、新しい創造を試みるまちづくりが必要とされるのである（p.76）。

伏見桃山城を経済活性化の手段とみなすのではなく、先人から受け継いだ「遺産」として大切に守りながら、新しい創造を試みることはできないであろうか。そのためには先ず、伏見桃山城を地域の生活者の視点から観光対象にする努力を、地域が主体となって行っていくことが重要だ。

須田（2006）は、観光資源について興味関心という視点の重要性を述べている。

観光資源となるものは観光者によって異なるということがわかる。即ち、同じ観光対象をとってみてもそれに興味関心のある人にとっては働きかえの対象、観光資源となり得るが、関心のない人にとってはいくらすぐれた観光対象があっても、その人には観光資源とはならない（p.51）。

伏見桃山城と同じような復元天守でありなが

⁵ 2009年7月4日に大坂城に問い合わせをし、聞いた数値である。

ら大坂城は、年間130万人を超える集客がある⁵。伏見桃山城に対して、先人から受け継いだ「遺産」としてとらえ、大切に守りながら、新しい創造を試みる場所としてとらえる視点を持つこと、これがエコの時代に相応しい資源の活用方法ではないだろうか。文化経済学の阪本は以下のようにいう。

環境に優しい文化的な生活について、これまで長い間慣れ親しんできた大量消費型のライフスタイルから、環境に優しいライフスタイルへの変更を少しでも容易にする方法があるとすれば、それは資源を浪費しない、環境に優しい、新しい楽しみを手に入れることだろう（2008, p.83）。

4-2. 文化発信拠点として活用する視点

上述したように伏見桃山城に観光資源としての視点をもつと同時に、そのような場で何をすべきかについて具体的な活用策を考えていく視点をもつことも重要である。

古池（2008）は、観光地作りに関して以下のように述べている。

一般的には観光地づくりは、地域の良さを知ることが第一歩となるであろう。そして、住み慣れた地域の歴史や文化、自然を学ぶことで、自らの地域を再評価することにつながっていく。こうして地域資源の新たな活用方法を考えていくことが可能になる。すなわち、固有の歴史や文化などを理解する過程で、地域への愛着が高まり、それが地域外に向けて発信する活動のエネルギーに転化すると考えられる。それは、地域の人々が一体になってまちを育てる「協育としての観光」という考え方と共振するものである。

協育の場は、同時に、創造の場へと発展していくことが必要である。それは、外部の人々との交流を通じて新たな産業や文化を創造することであ

る（p.200）。

古池のいうことを伏見にあてはめて考えるなら、伏見桃山城という建造物に愛着を持ち続けることがキーとなる。さらに、伏見独自の歴史や文化の拠点という付加価値をつけることを考えていくことが活性化には有効だ。「協育の場」として活用していく具体的方法について、筆者も、異世代交流の場として活用する方法、和など文化に関する習い事、稽古事をまとめて行う場としての活用方法などを提案している⁶。この提案に絡んで2009年5月30日、関西ベンチャー学会文化資産部会のディスカッションでは「伏見桃山城大学構想」が飛び出した。地元学のコアとなる場所としての伏見桃山城活用案も魅力であるし、他地域からの大学誘致も考えられよう。いずれにしても地域の人々が城に愛着を持ち続け、そこを訪れ、利用していくことを続ければ、城に新しい息吹を吹き込むことができる。

4-3. 地域の文化発信拠点から文化政策拠点へ

碓田他（2007）は、岡山県の町家を活用したイベントによるまちづくりに関する調査研究のなかで、日常的な居住の場である町家や町並みが、外部からの来訪者にとっては魅力的なものであること、同時に貴重な歴史遺産であることを地域住民自身に意識させる機会であるということを報告している。

この報告から、伏見桃山城の魅力に地域住民が気づくこと、次にイベントやコンサート等を行うなどして利用していくこと、そうすれば城の魅力が増していくこと、そのことで多くの来訪者を呼び込む可能性があること、などといった正のスパイラルを生み出すことが読み取れる。

6月に開催された「日本国際観光学会第10回全国大会」では、「旅育」ということが提唱されていた。東條（2009）いわく、

⁶ 金川、2008

- 井口 貢 (編著)
2008b 「観光資源と地域の文化資源
- 観光対象の多様化」
『観光学への扉』学芸出版社
- 金川由紀
2007 「観光英語についての一考察：観光英語とは」
平安女学院大学研究年報第8号、pp.37-43
- 金川由紀
2008 「ある観光資源活性化の取り組み
～伏見桃山城を舞台に和と輪で繋がる～」
第14回 観光に関する研究論文 観光振興や観光
交流に対する提言 奨励賞受賞 財団法人アジア
太平洋観光交流センター
- 古池嘉和
2008 「協働・連携としての観光」
『観光学への扉』学芸出版社
日本交通公社 [編]
2004 『観光読本 (第2版)』
東洋経済新報社
- プラネット・リンク編集 2008
『もったいない [完全保存版]』
マガジンハウス
- 阪本 崇
2008 「環境に優しい文化的な生活」
『入門文化政策 地域の文化を創るということ』
文化政策の扉②、p.83
- 須田 寛
2006 『新しい観光
- 産業観光・街道観光・都市観光-』
交通新聞社 2008年第10刷
- 東條仁英
2009 「旅育による地域活性化
- 「春蘭の里」(石川県・能登)の事例から-」
日本国際観光学会第10回全国大会発表論文集
pp.36-37
- 碓田智子、水川さやか、西岡陽子、岩間 香
2007 「町家を活用したイベント型屏風祭と雛祭に
よるまちづくりに関する調査研究
- 岡山県の倉敷と勝山の事例について-」
- 日本建築学会近畿支部研究報告集 pp.769-772
渡邊康洋
2008 「国際観光と文化政策
- 観光と文化の密接な関係-」
『入門文化政策 地域の文化を創るということ』
ミネルヴァ書房
- 山本兼一
2008 『利休にたずねよ』 PHP研究所
Ⓢ